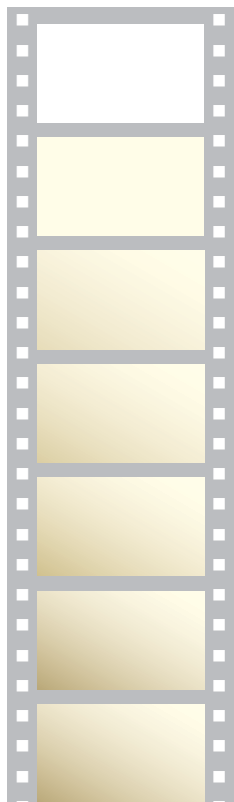


伸^ノさんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第六十三回 「アナウンサーへの道」③

アナウンサー試験のことを書くつもりが、前回すでにアナとして働いていたことを書いてしまいました。話が横道にそれてしまったので元に戻しましょう。

渋谷のアナウンス学校で実質6日間の講習を受けた時、講師の「ダジャレ」に声を出してぼくを含めた三人の生徒が笑ったところ、その講師は「いま笑った三人は、アナウンサーになれる」と言ったことに気をよくしたぼくは、暗中模索しながらアナウンスの勉強をしていました。

現在^{イマ}は、二年も三年も早く採用試験をして、優秀な人材を確保しようと試験の日程を早くする会社が多くなっていますが、昔は「青田買い」と言っただけは許されませんでした。

各放送局の昭和45年度社員採用試験は、昭和44年の6月・7月・8月に集中して実施されました。

ぼくが受験しただけでも、6月は4局（1社は書類選考で落選）。7月は5局（1

社は書類選考で落選)。8月は2局を受験、合わせて三ヶ月間で11局の試験を受け、最終面接まで進んだのは北海道の準キー局だけでした。

以前にも書きましたが、基本的にアナウンサー試験は、

- ・ 第一次音声テスト (どの位大きな声が出るか?)
- ・ 第二次音声テスト (どんな声をしているのか? 短い文章を読んでみる)
- ・ 第三次テスト (一般常識の筆記試験)
- ・ 第四次テスト (面接と音声テスト)
- ・ 第五次テスト (健康診断)

以上、五回のハードルがあるのです。(局によって順番は違います)

なぜ、五回もテストをするのかと言えば採用人数が少なく、受験者が多いアナウンス業務に志望が集中するため、会社では入社させるための試験ではなく、受験者を落として整理するための試験だからなのです。

例えば「紫陽花」と書いて何と読むか、反対に「あじさい」と漢字でどのような書くか?。「向日葵」の場合は?など、日頃使わない漢字の読み方や書き方、そして

究極なのは「日本の外貨準備高はいくらか?」、金融評論家や経済評論家でもあるまいし「そんな金額を覚えていて何に使うの」と、出題された学生側は、特にいろいろな局を受けているべくにとって、腹の立つ各局の入社試験でした。

(続)

文中敬称略

伸

平成25年4月